

結 論

本書の考察は、一三世紀のイエメン・ラスール朝の宮廷食材をめぐる世界を再構成するものであった。以下では本書で行った議論を再提示し、世界大のネットワークと地域内ネットワーク、王権が重なるところにラスール朝を位置付ける。

まず、第1部で示した、ラスール朝宮廷へ供給された食材やそこでつくられた料理は、世界大のネットワークとの関連においてとらえられる。食材の種類は多岐にわたり、特に種々の香料・香辛料類が用いられていた。これらの食材の供給元は、イエメンはもちろんのこと、エジプトを西端としたインド洋周縁部に拡がっている。一三世紀の世界においてこうした諸地域を結ぶ交易がある程度恒常的に行われており、そのこと自体がイエメンに興った一王朝の食生活に直接の影響を及ぼすものであったことを、輸入食材の存在は示している。さらにはラスール朝宮廷料理には、アッバース朝下やアイユーブ朝下で執筆された料理書記載の情報と一致するものも見られた。中世イスラーム世界で展開していた知の伝達の影響が、一三世紀のイエメンにおいても確認されるのである。そして宮廷で催された宴席は、継承された規則と支配体制内外の人々、そして多様な料理によって構成されるものであって、王権の存在を確認し合う場として機能した。アブールゴドや家島は様々な地域の交流が一三世紀に活発に行われていたと考えたが、ラスール朝の宮廷食材や料理はその具体的な一例を示すものである。

しかしながらラスール朝宮廷食材は、そうした世界大のネットワークによるばかりで説明されるものではない。

第1章で見た宮廷食材の大半がイエメン産であったこと、第2章で見た宴席が王権の存在を前提として催されていたことは、地域内ネットワークと王権についてより詳細に検討する必要性を示す。

そこで第2部では、地域内ネットワークについて検討した。宮廷への食材供給元に関する情報を収集、分析した結果、ザビードやアデンといった諸都市に宮廷食材が集まっていたことが明らかとなった。これらの都市が政治や経済の中心であったことは、断片的な記述をもとに先行研究ですでに述べられてきているが、本検討によって、これらの都市が産物が集散する地点であったことが実際に確認された。イエメンでは、自然環境が大きく異なる各地の特産物がそれぞれの中心都市に集められ、点在する支配者層のもとへ送り届けられたのである。その背景として、前イスラーム期より栄えてきたマッカを通る交易路が、ラスール朝期に入ってザビードやタイズ、アデンを中心にますます機能していたことを確認した。こうした状況は、宮廷への食材供給に携わる官僚たちのうちにこれらの三都市を中心とした地理認識を芽生えさせることになったと考えられる。彼らは、現代の私たちが史料をもとに推測できる「行程日数」にもとづいて都市間の距離をとらえていた。しかし同時代に作成されたイエメン模式図ではそうした認識は見られず、ザビードやタイズ、アデンを相対的に重視する姿勢が示されていた。これは、北部山岳地域（上地域）を拠点としたザイド派イマーム勢力との対峙のなかで生まれた、ラスール朝支配域の南部山岳地域こそを「イエメン」と呼ぶ習慣と、相互に影響を与え合ったことによるだろう。ラスール朝宮廷食材は、こうした地域内ネットワークと人々の地理認識を傍らにして、供給され続けていたのである。

そして第3部では、ラスール朝の王権について、宮廷組織と家内奴隷に着目した分析を行った。ラスール朝に設置された宮廷組織は、エジプト・マムルーク朝の宮廷組織と類似していた。これらはともに先行するアイユーブ朝の体制を引き継いだことに由来するもので、ラスール朝による周辺諸勢力に対する食材分配や宮廷への食材供給を担っていた。食材分配は、第1部で検討した宴席と同様に、ラスール朝の王権の存在を被分配者たちが確認・共有